

末近浩太著 (名古屋大学出版会、二〇一三年)

## 『イスラーム主義と中東政治』

——レバノン・ヒズブツラーの抵抗と革命』

横田貴之

レバノンを拠点に活動するシーア派のイスラーム主義組織「ヒズブツラー」は、一九八〇年代初頭にイスラエルのレバノン侵攻を機に誕生し、現在は同国最大のイスラーム主義運動として活動を継続している。しかし、ヒズブツラーは重要な研究対象ではあるものの、今日に至るまでその実態は十分には明らかにされてこなかった。

本書は、一次資料分析に基づく広汎かつ精緻な文献調査、レバノンなどでの細やかな現地調査によって、創設から現在に至るまでのヒズブツラーの実態を解明している。

ここでは、彼らが「自爆攻撃」の発明や合法政党化の選択などにおいて、「イスラーム主義のフロントランナー」で

あり続けていることが詳細に示されている。しかし、本書はレバノン国内の一組織に関するローカルなモノグラフだけに留まっていない。本書は、ヒズブツラーの実態解明を手がかりに、彼らを「中東政治の結節点」と位置付けることで、レバノン政治のみではなく、中東政治、さらには国際政治のダイナミクスを見事に描き出している。

「中東政治の結節点」とは何か。筆者によると、ヒズブツラーは、レバノン政治では、一九九〇年以降の「ポスト内戦期」において、同国最大の支持基盤を有する政党であり、イスラエルに対する武装闘争を継続する最重要アクターである。中東政治においては、イスラエルと恒常的な戦闘状

態にあるヒズブツラーはレバノン・イスラエルの二国間関係に大きな影響を与えており、中東政治を左右する重要なアクターとなっている。さらに、シリアを加えた東アラブ地域の三国間関係におけるキープレーヤーでもある。国際政治においては、ヒズブツラーは結成以来、反米・反イスラエルを標榜するイランの支援を受けてきた。ヒズブツラーとイランの同盟関係は、イスラエルを最重要同盟国とする米国の中東政策への最大の脅威となっている。ヒズブツラーの動向は、シリア、イラン、イスラエル、米国を主要アクターとする国際政治を左右する面を持っている。

このように、ヒズブツラーはレバノン政治、中東政治、国際政治という三層の結節点であり、また国民国家を超越するトランスナショナルな組織である。筆者はこのようなヒズブツラーを「地域研究の実践例」として位置付け、単一のデイシプリン・研究手法ではなく、地域研究の学際的な方法論を活用した分析を加えている。つまり、歴史学、思想研究、国際政治学、比較政治学、安全保障論、人類学などを横断的に援用することで、ヒズブツラーの実像を解明し、レバノン政治、中東政治、国際政治の連関を描き出すことに成功するだけでなく、既存のデイシプリン間を架橋するための視座をも鮮やかに提示しているのである。

では、本書の内容を簡単ではあるが概観したい。本書の構成は、序章、第一〜三部（計一〇章）、終章からなる。

第一部「国境を越える抵抗と革命」は、レバノンの内戦期（一九七五〜九〇年）を対象とする。第一章では、ヒズブツラー誕生の過程・背景が明らかにされる。近年公開されたつある一次資料に依拠して、ヒズブツラーが単なるレバノンの抵抗組織でも、イランの革命支部でもないことが示される。それはイラン・イラク・レバノンにまたがるシーア派ネットワークに依拠しつつ、イラン・イスラーム革命やイスラエル軍のレバノン侵攻など一九七〇年代末〜八〇年代初頭の中東政治の変動によって抵抗と革命が結合して誕生したイスラーム主義運動であった。第二章では、一九八五年に発表された「公開書簡」を手がかりに、ヒズブツラーの抵抗と革命の思想が考察されている。その思想には、汎イスラーム主義と反植民地主義というホメイニーのイスラーム革命思想からの強い影響を看取できる。また、「公開書簡」はホメイニー思想を踏まえつつ、レバノンにおける抵抗と革命の実践に関しては、レバノンの政治的現実の中で決められるとの独自の見解を示すものでもあった。第三章は、一九八〇年代におけるヒズブツラーの勢力拡大、および国内外へ政治的影響力を及ぼすアクターに

なった過程を明らかにする。筆者は、内戦を単なる国内権力闘争ではなく、「国家変容」（末近二〇〇五）のモメントとして捉え直し、ヒズブツラーの台頭は国内／地域／国際システムが密接に連関する新たな政治環境の変容の一部であったとする。

第二部「多元社会のなかのイスラーム主義」は、一九九〇～二〇〇五年のシリアによる実効支配下の「擬似権威主義の時代」を対象とする。第四章は、レバノン第二共和制（一九九〇年以降）におけるヒズブツラーの合法政党化を、国内レベルの内戦終結、地域レベルの中東和平プロセスの進展、国際レベルの冷戦終結に伴うイラン・シリアの政策転換という「第一の逆風」への対応として考察する。そこでは、汎イスラーム主義から国内政治への転換を伴う「ローカル化」、活動手段の非合法から合法への転換を伴う「制度化」という「ヒズブツラーのレバノン化」が見られた。第五章は、二〇〇〇年国民議会選挙の分析を通じて、ヒズブツラーの政党活動がレバノンの民主主義と国民統合にいかなる影響を与えたのかを論じる。ヒズブツラーは第二共和制の政治環境に合致する形で、従来のクライエンティリズムに基づくシリア派コミュニティへの利益誘導と宗派横断的な連携ポリティクスを同時並行的に追求した。

それによって選挙に勝利し、宗派を超える広範な支持基盤の構築に成功した。第六章は、ヒズブツラーの対イスラエル闘争の変容を論じる。ヒズブツラーにとって、二〇〇〇年のレバノン南部からのイスラエル軍の撤退は国内・地域レベルにおける対イスラエル闘争の大義を揺るがし、翌年の米国による「対テロ戦争」の発動は国際レベルでの逆境をもたらした。この「第二の逆風」に対して、ヒズブツラーは独自の「対テロ戦争」の言説を構築し、自らをパレスチナ解放の大義にリンクさせることで、存在意義を刷新し、対イスラエル闘争を継続させた。第七章は、ヒズブツラーがレバノン国内で展開する社会サービステとそれに関わる人々の実践を明らかにする。ヒズブツラーが建設を呼びかける「抵抗社会」に対して、自らの状況に応じて社会サービステに関わったり距離を置いたりする人々のしたたかな生活戦術、そして両者間の複線的、重層的、流動的な関係が見られる。

第三部「今日の中東政治の結節点」は、主に二〇〇五年の「杉の木革命」以降が対象である。第八章は、二〇〇六年の「レバノン紛争」を事例に、ヒズブツラー・イスラエル間の全面戦争を抑止する暗黙のルールである「恐怖の均衡」が、ヒズブツラーの壊滅を目指すイスラエルの安全保

障政策の転換によって崩れ、レバノン・イスラエル間の事実上の全面戦争に至ったと指摘する。しかし、結果的にはヒズブツラーとイスラエルの双方が勝利宣言をする中で、「恐怖の均衡」が復活し、レバノンでは抵抗運動としてヒズブツラーを支持する機運が広がった。第九章は、「杉の木革命」後の民主化が挫折した要因について、レバノン国内における親シリア派と反シリア派の激しい政治対立が政治的機能不全をもたらした点にあるとする。その中で、支援者であるシリアを撤退に追い込んだ「杉の木革命」という危機に対して、ヒズブツラーは親シリア派を糾合して権力奪取の試み、すなわち「レバノンのヒズブツラー化」を成功させた。第一〇章は、「アラブの春」がもたらした中東の政治変動、特に筆者の言う「三〇年戦争」の構図を揺るがすシリア内戦に対して、ヒズブツラーが自らの存在意義を懸けて、既存の構図を保守する立場に至った過程を分析する。そして、終章では議論のまとめとして「イスラーム主義のフロントランナー」「中東政治の結節点」「地域研究の実践例」の三つの視点から、ヒズブツラーが有する意義と今後の研究課題が提示される。

以上、本書の内容をきわめて簡潔に概観したが、筆者と評者の共通の関心である「ポスト・イスラーム主義」にも

言及したい。「アラブの春」後のアラブ諸国におけるイスラーム主義組織の政治的な台頭と後退は、「政治的イスラームの失敗」(Roy 1994; 2014)の問題をイスラーム主義研究者に突きつけている。ロフは、イスラーム国家樹立に失敗したイスラーム主義は、公的領域から私的領域へと活動を移すと主張する。これに対して、筆者は終章において、ヒズブツラーには「失敗」やそのような移行も見られないとした上で、バヤート (Bayat 2007) の議論を援用しつつ、イスラーム主義は「状況」に応じた形で「計画」を練り上げながら、個人、社会、国家を横断する形でイスラーム化のための営為を継続しているとみる。また、イスラーム化とポスト・イスラーム化は同時並行的なプロセスにもなりうるという。本書を通読すれば、ヒズブツラーの組織運営上の戦術的・戦略的柔軟性をうかがうことができ、筆者の主張が正鵠を得ていることは明らかである。評者の研究対象であるエジプトのムスリム同胞団の政治的台頭・後退を考える際、優れた分析に基づいて筆者が明確に示したこの回答は、評者にとって今後の研究の確固たる準拠の一つとなろう。

最後に卑近な話で恐縮であるが、評者は本書を手にとつて以降、指導学生に「中東地域研究の手本となる本を教え

てほしい」と問われた際には、必ず本書を紹介するようにしている。繰り返しになるが、本書は一国内のローカルなイスラーム主義組織を起点に、国内政治／地域政治／国際政治の複層を行き来し、複数のディシプリン・学問領域を縦横無尽に横断して、トランスナショナルな研究対象の実態を重層的に解明している。その卓越した研究方法とその成果は、本書が今後のレバノン研究、中東地域研究、イスラーム主義研究の必読文献になりうることをはっきりと示している。必ず手に取るべき好著といえよう。

#### ●参考文献

- 末近浩太 (二〇〇五) 『現代シリアの国家変容とイスラーム』ナカニシヤ出版。
- Bayat, Asef (2007) *Making Islam Democratic: Social Movements and Post-Islamist Turn*. Stanford: Stanford University Press.
- Roy, Olivier (1994) *The Failure of Political Islam*. London & New York: I. B. Tauris.
- Roy, Olivier (2014) "The Transformation of the Arab World," in Larry Diamond & Marc F. Plattner (eds.), *Democratization and Authoritarianism in the Arab World*. Baltimore: Johns Hopkins University Press, pp.13-28.

#### ●著者紹介

- ①氏名……横田貴之(よこた・たかゆき)。
- ②所属・職名……日本大学・准教授。
- ③生年・出身地……一九七一年、京都府。
- ④専門分野・地域……中東地域研究、現代エジプト政治、イスラーム主義運動。
- ⑤学歴……京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科、京大大学院博士(地域研究)。
- ⑥職歴……(財)日本国際問題研究所研究員を経て、現在に至る。
- ⑦現地滞在経験……エジプト・カイロの調査(一ヵ月)の他、現地において一週間〜一ヵ月の滞在を複数回。その他、ロンドン、イスタンブール、アンカラなどでの調査に従事。
- ⑧研究方法……現地における参与観察などフィールド調査と、アラビア語一次資料による資料解析を行う。社会運動論を中心に、権威主義体制下の反体制運動の研究を進める。
- ⑨所属学会……日本中東学会、日本オリエント学会、日本イスラム協会、日本国際政治学会、日本比較政治学会など。
- ⑩研究上の画期……初めてのフィールド調査で経験したエジプト人の底抜けの明るさ。最近では、ムスリム同胞団のエジプトにおける政権掌握とその後の非合法化。
- ⑪推薦図書……横田貴之『原理主義の潮流——ムスリム同胞団』山川出版社、二〇〇九年。青山弘之編『アラブの心臓』に何が起きているのか——現代中東の実像』岩波書店、二〇一四年。